

# 製材屋の視点から提案する 木の家具と雑貨のある暮らし

ノッティーハウスリビング 亀山市

レジナルから入口を見ていると、男性客と女性客がみごとに左右に分かれてゆく。女性の行く先は決まって左手の雑貨ブースで、男性が向かうのは右手の家具ブースだ。

「敷居が高いと思われがちな家具工房に、気軽に入ってもらおうと雑貨ブースを設けました。お客の入りはちょうど半々。もちろん今は両方にしっかりと力を入れています」

関町で製材業を営む「三栄林産」を母体とする同店は、三男の坂丈哉さん(30)が店長を務める、木の家具と雑貨の店だ。扉一枚隔てた裏手で、丸太を抱えたフォークリフトが忙しく走り回っている。

大学卒業後、東京のリサイクルショップで汗を流していた丈哉さんだったが、火災に見舞われた実家を見かねて帰郷を決意した。

「東京での仕事もやりがいがある

出てきたところで、地元にも帰るかどうかはとても悩まされた。でも、帰省するたびにわたかまっていた、荒れ果てた故郷の山を何とかしようと考えたんです」

帰郷後ほどなく、県産材のPRと顧客への直接窓口としての家具工房を、父親に提案。「やってみろ」と託された店舗を、リサイクルで培った「もつたない」の精神で切り盛りする。

方針は、国産材でつくるオーダーメイドの家具を手頃な価格で提供すること。訪れる人に国産材使用の意義を説くことで、山の活性化に貢献できればとの考えからだ。

テーブルや椅子など、素材な味わいの木の家具は、お客様の細やかなオーダーに応じて好評とか。アフターケアや材料のみの販売にも応じてくれる。



木の素材を活かした家具を多数展示している(左)。  
木のおもちゃや器、香りの小物などが並ぶ雑貨コーナーは、フェアトレードに賛同した品々が(上)。  
家具ブースに立つ坂店長(左下)。

